

第15回東奥日報報道審議会／詳報／原子力安全なお検証を

第15回東奥日報報道審議会が2日、青森市の東奥日报社本社で、高橋興青森中央学院大学教授、関場慶博せきばクリニック院長、神山智子八戸プラザホテル常務取締役営業担当の3委員が出席して開かれた。(1)連載「3・11大震災 青森考 フクシマの教訓」(2)原発事故による風評被害(コメ、リンゴ、畜産など)(3)夢に挑む県人らを紹介する夕刊連載「チャレンジャーが行く」一の報道について、本社側出席者と意見交換した。3委員からは「フクシマの教訓」について、東京電力元幹部の証言を掲載した記事などを評価する意見や、今後も原発事故を風化させず、県内の原子力施設についても安全性の検証を継続するよう求める意見が出た。また、風評被害については、確かな情報に基づく分かりやすい記事や解説の掲載を求める指摘があった。一方「チャレンジャーが行く」については、読者を励まし、元気づける企画だと評価する声が相次いだ。

●本社側出席者

社長・主筆	塩越 隆雄
編集局長	村上義千代
編集局次長	広瀬 昇
報道部長	福井 透
報道部長	菊地 幹
生活文化部長	南谷 毅
読者相談室長	野田 尚志

●東奥日報報道審議会

東奥日報の報道が、読者に伝えるべき情報を分かりやすく伝えているか、読者対応が誠実だったか、などを「第三者の目」で判断し、必要に応じて見解(提言)を示してもらうことを目的に、2001年6月に発足した。委員3人(任期2年)で構成し、審議内容などを紙面で公表している。編集局読者相談室が事務局を務め、01年7月から開催し、08年度からは年2回開いている。

高橋 興委員

たかはし・こう 弘前大学教育学部卒。県立高校長、県総合社会教育センター所長などを経て、2007年から青森中央学院大学経営法学部教授。文科

省中教審生涯学習分科会委員。65歳。青森市在住

関場 慶博委員

せきば・よしひろ 福島県立医科大学卒。1983年、藤崎町に「せきばクリニック」を開業。日本小児科医会国際委員、県小児科医会副会長、南黒医師会理事を務めている。弘前ロータリークラブ会員。61歳。藤崎町在住

神山 智子委員

こうやま・ともこ 東横学園女子短期大学家政学部卒。2005年、八戸プラザホテル入社。11年から同ホテル常務取締役営業担当。元第5次八戸市総合計画戦略プロジェクト委員会委員。43歳。八戸市在住

連載「3. 11大震災青森考フクシマの教訓」／考えさせられる内容 高橋委員／読者の要望に応えた 関場委員／現実あらためて理解 神山委員

本社 東日本大震災で起きた福島第1原発事故は、原子力施設が集中立地する本県にも大きな衝撃をもたらした。そこで連載「3・11大震災 青森考フクシマの教訓」と題して、事故から得られる教訓などを追跡した。7月から11月にかけて第1～4部を掲載。苦悩する福島の地域住民や東京電力元幹部の証言、津波に耐えた各地の原発、北海道や岩手の動きなどをレポートしている。

高橋委員 一連の連載を読んで、大変勉強になった。特に、東電元幹部への取材を中心とした第2部。多くの県民は承知だったのかもしれないが、大津波ではなく竜巻などを想定したアメリカ型の原発を、日本の沿岸部でそのまま建設していると記事にあった。また、8月18日付の記事では、東電が必要と考えた原発の改良工事に踏み切れなかったのは、地元の説明し理解が得られる合理的理由を見つけられなかったという一節があった。原発については事業者も地元もあまりにナーバスになっていて、事業者側が改良、改善をためらう構図ができたのではないかと、この記事を見て考えさせられた。

また、東電には通産省の幹部OBがかなり天下っていたという記事があった。

先ごろ本紙の「真相実相」で県幹部の天下り問題を大きく報道していたが、本県にも原発関連事業が相当あり、本県の場合はどうなのかという疑問も感じた。

第4部では、本県に隣接する北海道や岩手県の動きを取り上げていた。函館

市民、岩手県民の思いも丹念に拾い上げていて大変いい連載だと思った。一方で、秋田には報道するような動きが何もなかったのかと疑問に思った。

関場委員 ここ1カ月で島根の松江、福島の郡山、大阪を訪れる機会があった。島根や大阪では原発事故が話題にならず、事故から9カ月たち早くも風化が始まったようだ。メディアが、原発事故の問題をどんどん取り上げることは大事だと思う。原発事故は今も続いているという意識を日本全体が共有しなければならないと思っている。その中で今回の連載を大いに評価したい。原発を持っている県と、持っていない県とでは微妙に危機意識が違うのではないか。

本県が多くの原発関連施設を抱えている中で、多面的多角的な検証が行われ、優れた記事内容と思っている。

前回の審議会でも指摘したが、現在はツイッターなどソーシャルメディアがたくさんあり、いざ、ことが起きた時の情報のスピードでは、ソーシャルメディアに新聞が勝てるわけがない。ただ、速いがゆえに不正確な情報もある。その中で、新聞は迅速性に劣ったとしても、確かな検証に基づく信頼性、読み応えある記事を読者に求められていると思う。今回の連載は見事にこの要望に応えてくれたと思う。

また、この連載では、県内の原子力施設の安全性について、電源確保と浸水防止を柱とし、再処理施設は対応しているか—などと検証しているが、それ以上に気になるのが、地震そのものへの対策。県内の各施設が活断層の問題について、最新の知識に基づいてもう一度検証されるべきと思う。その報道に期待したい。

神山委員 震災後、私は八戸から出ることがなく、福島の様子はテレビや新聞の報道でしか知り得なかったのが、連載記事で福島の現実をあらためて勉強させていただいた。8月1日付の記事には、南相馬市長への取材記事が掲載された。ちょうどテレビでも市長が取り上げられていた。動画投稿サイトで政府の対応を批判し「世界で最も影響力のある100人」にも選ばれて、いろいろな形で報道されていたが、あらためて市長の主張が理解できた。

本県の原子力施設は東通、大間の原発や六ヶ所村の再処理施設など県内の太平洋側に集中して立地する計画だが、第4部では、北海道・函館や岩手が本県の原子力施設をどう感じているか取り上げていた。いざ、青森で何かあったら

どうするか—という問題について、海の向こうの北海道側でも考えていると分かった。「青森考」と題されているので、青森はこれからどう進んでいくのか見ていきたい。知事や町長・村長、住民の考え方も今までと同じなのか、変わっていくのか注目していきたい。

本社 原発事故後、本紙として事故現場に行くべきか、共同通信の配信記事を掲載するだけでいいのか、社内でいろいろ議論があったが、新聞社として現場を見る使命があると考えた。「青森考」のタイトルを掲げており、第4部で終わりということだけでなく、今後も県内の状況を取り上げ、安全対策や避難対策について報じていきたい。県民一人一人が青森をどう考えていくのか、今後も材料を提示していく。活断層については、国が電力会社に再調査を指示している。その結果を踏まえてきちんと報道したい。

関場委員 高速増殖炉「もんじゅ」の意義が、国の事業仕分けで問題になった。六ヶ所村で計画されている使用済み核燃料再処理の意義について、県内では何か議論することがタブーになっているようだが、これからは使用済み核燃料再処理が本当に必要な技術なのか、経済的に見合う事業なのかという視点でも、県内原子力施設の在り方を問う必要があるのではないか。

第15回東奥日報 **報道審議会**／原発事故による風評被害／台湾ルポを高く評価
関場委員／前向きな報道ほしい 神山委員／節目に解説記事必要 高橋委員

本社 福島第1原発事故では放射性物質による汚染拡大への懸念から、直接被害を受けていない地域の農作物を消費者が買い控えたり、外国人観光客が訪日を取りやめたりする現象が発生した。本県でも県産牛肉の価格が下落したほか、台湾向けリンゴ輸出も落ち込んだ。また、旅行客が減少し、宿泊施設が打撃を受けた。

関場委員 私は本県の主力産品であるリンゴ、コメ、畜産などの風評被害を報じた一連の記事は高く評価している。特に台湾のルポ。県産リンゴの風評被害に関して、読んでいて大変いい記事と思った。いろんな方にインタビューしていたが、その中で「説明が足りない」とか「日本産が安全なら情報をきちんと伝えろ」という果物店主がいた。私はこの辺りに風評被害の実態があると思う。結局、説明が足りない、情報が足りないから風評が広がる。そして消費者離れが起きて、売れないとなる。となれば県産リンゴの安全性を積極的に早く説明していけばいいのに、と素人考えで思う。県の情報発信も後手後手だった

のではないか。インターネットで速やかに県産リンゴの安全性を訴えてほしいかった。私だったらツイッターに、韓国語、中国語、台湾語、英語の書き込みをするのだが。また、台湾ルポでは、近年は県産リンゴの品質にばらつきがある、贈答用なのに品質が悪い—という声も紹介された。本紙を通じてソーシャルメディアの利用や、品質確保策を提言してもらいたい。

神山委員 県内の主力産業の実情が多岐にわたって報道されたと思う。特にリンゴについて報道が多いという印象を受けたが、作り手、生産者も自主防衛をしながら、風評被害を受けないように一生懸命努力していると、報道から知り得ることができた。もちろん、食品に関しては安心安全を私たちは第一に求めており、報道がとても大きな役割を担っている。なるべく確かなデータに基づいた情報を分かりやすく、私たち一般読者に届けてほしい。

八戸に住んでいるとどうしても水産関係の話を耳にすることが多いが、水産業界もさまざまなデータをとったり、頑張っている。国の対策や風評被害を解消する難しさを報じることも大事だが、みんな前向きになれるよう、県民の意識が一つに向かうようにうまく導いてくれる報道もほしい。一連の記事を見てそう思った。

高橋委員 地元ならではの感じさせる足で集めたような記事が多く、さすが地元紙という印象を強く受けた。ただ、指摘したいこともある。「いつ、どこで、こんなことが起きた」というニュースだとネットでも見ることができる。

やはり新聞が生き残っていくには、解説の役割が大事。これほど長期間に及ぶ問題であれば、節目節目で解説記事があってもよかったと思う。

また、神山委員から水産の話もあったが、私も、被災地でもある八戸は風評被害は受けなかったのかという印象を紙面から受けた。県内の水産業に風評被害はなかったのだろうか。

台湾ルポに関連して、これからでもやってほしいと思うのは、台湾では風評被害だけでなく、全般的にリンゴの輸出競争が厳しくなっているという記事に関することだ。その競争相手は、またしても韓国だという。本県産リンゴを追い上げているという韓国は、どんな取り組みをしているのか知りたい。そのところを追い掛けてぜひ記事にしてほしい。

本社 風評問題については生産者のため、消費者のための記事を書くことを念頭に置いている。県内の4地域で収穫したコメから放射性物質が検出されなかったという記事を、各地域の検査結果が判明し次第、順次1面に掲載した。

八戸の記事が少ないという指摘があったが、壊れた港湾施設の復旧状況を非常に手厚く伝えてきた。また、八戸市の水産事務所が毎月1回、水産の統計をまとめていて、定点観測で報道している。農林水産業だけでなく、本県の観光業界も補償を求めて国に陳情や請願をしており、引き続き報道したい。

第15回東奥日報報道審議会／連載「チャレンジャーが行く」／私自身が励まされる 神山委員／教育面での活用望む 高橋委員／気持ちよい情報提供 関場委員

本社 本紙夕刊に毎週金曜日掲載している連載「チャレンジャーが行く」は、地域おこしやボランティア、企業、スポーツなど、さまざまな分野で夢に挑む県人、本県ゆかりの人を紹介している。

神山委員 毎回いつも楽しく拝見している。特に私が知っている方が載っていると「頑張っているな」と、自分自身が励まされる気がする。記事には、大きな力ではなくとも、一個人が小さな力を積み上げていく過程が書かれている。

こういった一人一人にスポットを当てる企画は、その人を支えている方も力強く思うだろう。読者はますます、その人を後押ししてあげようという気持ちになるのではないかな。

8月5日付には、鯺ヶ沢町の人気犬「わさお」のプロジェクト代表が掲載された。わさおには一度会ってみたいと思わせる“癒やしパワー”がある。記事を読んで八戸とは反対側の日本海に面した鯺ヶ沢町を訪れたい、そして飼い主の菊谷さんの店からイカ焼きを買ってみたいと思わされた。これも一つのわさおプロジェクトの狙いだと思う。

今後もさらに魅力的な人たちを紹介してほしいし、県民の力のもとになる記事を載せてほしい。とてもいい連載だと思った。

高橋委員 私も神山委員と同感だ。魅力的な人がいっぱいいるんだなと、あらためて感じた。7月15日付に掲載された七戸町金子ファームのジェラート

は、私も何回か食べたことがあるが、こういう経歴を持つ人が、こんな思いで作っているのかと興味深く読んだ。

魅力的な人がいるということが、町の魅力につながる。七戸町だって、わさおのいる鱒ヶ沢町だって、町の魅力を支えているのはこんな人たちだと思う。

この連載企画は、まちづくりの強力な応援団役を果たしていると思う。

もう一つは、私の個人的な強い思い。今、子供たちのキャリア教育の重要性が指摘され、そのための学校と地域の大切さが指摘されている。私は連載に取り上げられたような地域で輝いている人々と子供たちが、できるだけ多く接することができるような仕組みづくりを提案したい。東奥日報で世論喚起をしてほしい。記事で紹介されたような方々には、さまざまな形で教育面でもぜひ活躍してほしい。

関場委員 新聞に限らず、メディアが取り上げる題材はネガティブなものや、事件が多いが、われわれの実際の日常はそんなことはないはず。今回の連載で、ポジティブな情報を提供してもらい、読んで大変気持ちよく、勇気づけられ、爽快感があった。

取り上げられた人は身体能力が抜きんでたり、技術力がある人もいるが、多くは本当に身近にいるような方だった。ちょっとしたピンチでもチャンスに切り替える勇気があるとか、発想の転換ができる想像力が少し人よりあるとか、そういった方々が、チャレンジャーとして成功、あるいは成功しつつあるのかなという気がする。

この連載で取り上げられた人々だが、これらの人々の単なる個人的なサクセスストーリーであれば、こんなに魅力を感じないと思う。取り上げられた人には「仲間と一緒に何か人の役に立ちたい」「世の中の役に立ちたい」という思いで挑戦しているという共通点があるのが共感を呼ぶ。

神山、高橋の2委員も言っていたが、これからも、こういう気持ちのよい勇気を与えるような記事を大いにお願したい。

本社 こんなすごいことを、誰も知らない青森県ゆかりの人がやっている、紹介したい、何人もいるはずだ—と、そういう思いから始めた企画。人を探す

のは一苦勞だが、ヒューマンストーリーとしてうまく取り上げたいと思っている。地域おこしやコミュニティービジネスなどを手掛けている人を探そうと、支社局の記者にもお願いしている。実績中心の記事では伝えきれない内容をきちんと聞いて、ストーリーにまとめるのは若い記者の良い経験にもつながる。

高橋委員 地域づくりなどに貢献して、表彰を受けている全国の団体・人は、地元で報道されて活動に勢いがついたという話を聞く。地元紙に取り上げられると元気が出るのではないか。

【写真説明】本紙報道について意見を述べる（右列手前から）神山、関場、高橋の各委員